

2016年(平成28年)5月26日(木曜日)

読売新聞

「かん」の強い子 遺伝子変異で

急に泣いたり不機嫌になったりする、いわゆる「かん」の強い子どもは、遺伝性の遺伝子変異による病気が原因となっている可能性があることが判明し、秋田大や京都大などの研究チームが発表した。寒さや疲れなど少しの刺激で鈍い痛みを誘発し、症状が表れる。研究チームは、「小児四肢疼痛発作症」と命名した。研究成果をまとめた論文は26日、米電子版科学誌プロスワンに掲載される。

秋田大など説明

●小児四肢疼痛発作症が引き起こす主な症状



- 急に泣く
- 不機嫌になる
- 足を床につけたがらないなど

寒さなど刺激 痛みに

この病気は、特定の遺伝子変異すること、痛みを脳に伝える神経が発作的に過剰に高ぶり、わずかな刺激で月に10〜20回程度、手足の関節などに鈍い痛みを生じさせる。言葉を覚える「痛い」と訴えるようになり、中学卒業頃には症状は軽くなるという。

秋田大医学部付属病院に2010年、手足に痛みを感じる幼児が訪れ、医師が家族に聞いたところ親や兄弟にも同様の痛みがあった。12年から、同じような症状を訴える6家系23人の協力を得て、遺伝子を解析した。

秋田大大学院の高橋勉教授は、「成長に伴い痛みがなくなるため、成長痛と考えられ見過ごされている可能性が高い。潜在的な患者数は多いとみている」と指摘。今後、治療薬の開発研究にも取り組むという。